

境内の北、旧中山道に面したところにある、伝道掲示板の令和6年7月に掲載するものを紹介します。

伝道掲示板

blogから

伝道掲示板には1ヶ月にひとつの言葉を紹介しています。経典の引用や詩や小説のなかの言葉であったりします。道ばたの1メートル四方の掲示板ではお伝えできない、ことばの周辺はblogに載せています。松岩寺ホームページからブログへリンクしています。



写真 千田完治

七月のことば
命もいらす、名もいらす、
官位も金もいらぬ人は、
仕末に困るものなり。

『西郷南洲遺訓』

聞いた話によると、東京銀座にある「木村屋」に、この春以降しばしば行列ができるという。どうしたのだろうか。

理由は、令和七年前期のNHK朝の連続ドラマが『あんぱん』だから。

ご存じのとおり、「アンパンマン」の作者、やなせたかしと妻、暢のものがたりです。ドラマの登場人物が、銀座・美村屋で修業していたという設定で、そのモデルと思われる木村屋に人が押し寄せるのでしょうか。しかも木村屋には、明治時代に発案され今も店頭にならぶ、名物のあんぱんがある。なぜ名物かというところ、酒酔母をつかい、あんぱんのへそに桜の塩漬けが埋め込まれているから。

さて、『西郷南洲遺訓』（岩波文庫）から引用した今月のことばは、西郷隆盛（一八二七～一八七七）のもので。銀座・木村屋のあんぱんと関連があります。南洲は詩や文章をつくる時の雅号らしい。

西郷どんとあんぱんはどうつながるのか。「命もいらす、名もいらす、官位も金もいらぬ人は、仕末に困る」とは誰のことなのかを明らかに

すればあんぱんの謎がとけます。

これは、西郷が幕末の旗本、山岡鉄舟（一八三六～八八）を評した言葉です。西郷が鉄舟と始めて会うのは慶応四（一八六八）年。

西郷は官軍として江戸城を総攻撃するために東へ向かっていました。勝海舟が進軍を阻止するために山岡鉄舟を西へ派遣する。出会ったのは駿府。事前協議のかがあって、勝海舟と西郷が江戸高輪の薩摩藩邸で、無血開城を決めます。西郷が鉄舟の手柄を後日評したのが、冒頭の言葉です。最高のほめ言葉です。

新政府は成立したけれど、混乱のつづく明治五年、鉄舟は岩倉具視と西郷隆盛の切なる推薦で明治天皇の侍従になります。ただし任期十年間の約束です。名もいらす、官位も金もいらぬ鉄舟です。

三年後の明治八年四月、天皇が水戸徳川家の屋敷に行幸します。桜の花見です。その時、鉄舟の指導のもとに天皇へ献上されたのが木村屋の桜漬けあんぱん。ことのほか喜ばれたとか。

明治天皇、西郷隆盛、勝海舟、山岡鉄舟、アンパンマンがひとつの線で結ばれました。

さて文末に、今年の三月一日、日経新聞歌壇にのっていた一首を紹介しておきます。

つかぬことお聞きしますがアンパンマンは
つぶあんですかこしあんですか
横浜 吉澤信子

編集後記

○右の欄でNHK朝の連続ドラマを話題にしました。朝ドラ・ファンで思い出すのは、作家の林真理子さんです。林さんは現在、揺れる某大学の理事長をなさっています。やっかいな職務を引き受けなくてもよいだろうに。まさに、「命もいらす、名もいらす」なのでしょう。

○林真理子さんが「大人の新学期」という意味深なタイトルで、令和五年十月十日付け日経新聞夕刊「あすへの話題」欄に執筆したコラムがありました。いつが大人の新学期かというところ、NHK朝ドラの改編というのは、大人の新学期かもしれない。夕刊一面のコラムは、次のように続きます。「毎朝聞き慣れたテーマ曲が、十月を境にがらりと変わり、画面には全く新しい顔ぶれと舞台が映る。主人公が半年間のクラスメイトになるのだ」。クラスメイトだとすると、仲の良いものもあるし、付き合いたくないものもある。

○私はまったく見ない半年もあるし、熱心に見る半年もあります。今期の「あんぱん」は普通にみています。コレを書いているのは六月二十日。朝ドラ「あんぱん」は昭和二十年八月十五日の玉音放送が流れたところで終わりました。終戦の玉音放送で有名な一節、「堪え難きを堪え、忍び難きを忍び」は、仏教経典の言葉です。

○経典の言葉を経蔵から引っぱり出し歴史の転換点に立ち会わせたのは山本玄峰という禅僧です。その玄峰老師と大正三美人のひとりといわれた歌人の柳原白蓮のおもしろいエピソードをみつけました。すごいショッキングな出会いでショッキングな歌を作っていますが、今まで誰も気づかなかった？ ご紹介したいのだが、ずいぶん長い文章になってしまっただけで無理。そのうち、お見せできるだろうからご期待を。（博芳）

句云 風が吹く仏来給ふけはひあり 令和七年盆會 建之

「お盆の塔婆は、毎年同じことばを書いているのだろう」と思われるのも本意ではないから（ありていに言えばシャクだから）、裏面は毎年ちがう文句を書いています。
今年「風が吹く 仏来給ふ けはひあり」。高浜虚子（一八七四～一九五九）の俳句です。「仏来給ふ」は「ホトケ キタマウ」と読むのでしょうか。先住職は普段から、ひらがなまじりの塔婆を書いていました。私もときどき真似しているけれど、お盆の塔婆でひらがなまじりは初めてです。どうしてかということ、これはあまり正直に書きたくないのですが、ひらがなの方が字数が多くなって、書くのに時間がかかるのですね。

それでも、今年は「エイ」と決心しました。なぜ、「エイ」と思い切ったかというところ、これも書きたくないのですが、去年のお盆の真つ最中とその前後に、出版社から送られてきた、拙書『またまた、おうちで禅』の原稿を校正していたのです。だから、慌てて書いている。今夏は丁寧に書かねば！

というわけで、今年の塔婆の裏面は、正岡子規の俳句革新の後継者である虚子の句です。「盆の迎え火をしたら、風が吹いてきて、亡き方がおいでなされた心配がする」といった風情でしょうか。願わくは、今年のお盆、ご先祖さまが気分良くお帰りになれる涼風でありますように（無理そうだな）。